

八十八年分の愛情

附属新潟中学校 二年 長谷川 千紘

「お米一粒には、農家さんの八十八年分の愛情が込められているんです。小学校に入学して二回目の給食の時間に担任の先生が言った言葉だ。私は当時六歳九か月。八十八年なんて想像できない時間の長さだ。「そんなに長い間、一つのこと集中できるのは、きっと仕事だからなんだ」だろうな。私はそんなふうに考えていた。

全国納税貯蓄組合連合会・国税庁

私の家では、母の知人の実家から直接お米を購入している。毎年五月と九月に、その農家さんのもとへ出かける。少し腰の曲がったおばあちゃんと、三十キログラムのお米を軽々と持ち上げるおじいちゃんが私達を出迎えてくれる。あの言葉を聞いた一か月後、家族全員でお米を買いに行った。すると、おばあちゃんが丁度、畑の野菜に水をあげていた。麦わら帽子からは真剣な眼ざしが覗いた。父が声をかけると、

、「よく来てくれたねえ。」
 そう言っ、笑顔でこちらを振り向いた。何
 回かお米を荷台に積み込んだあと、「お礼を言
 っ、車に乗った。おばあちゃんはずっと
 笑顔だった。帰り道で私は母に尋ねた。
 「あのおばあちゃん、野菜も売っているの。」
 すると母は首を振った。
 「畑の野菜は自分達の家族で食べる、と前に
 言っていたよ。」
 私は不思議だった。売り物にはしないつもり

全国納税貯蓄組合連合会・国税庁

なのに、なぜあれほど集中できるんだろう。
 あれほど気持ちの込もった目をしているのだ
 ろう。
 翌週、ヒントになる出来事があった。大型
 連休が明けて、久し振りの給食の時間のこと
 だ。席が近いうち同級生の顔をチラリと見た。彼
 女はごはんを口にいれると、にこりと笑って
 「おいしい」
 と何回も言った。私のなかで、その映像がひ
 っかかった。そして気付いた。あのおばあ

やんは、食べる人のことを真剣に考えている
 んだ。だからあれほど気持ちの込もった目を
 していたんだ。その日の夕食の時間に、私は
 母に自分の考えたことを伝えた。
 「確かにそうかもしれないね。あなたがどん
 な顔をして食べるか考えて、私もごはんを
 作っているよ。」
 そう言っ、母は笑った。
 今、私たちはどんな食生活を送っているだ
 ろうか。食事の仕度が面倒なら、気軽に外食

全国納税貯蓄組合連合会・国税庁

ができる。インターネットでデリバリーのピ
 ザも注文できる。コンビニエンスストアやス
 ーパーに行けば、インスタント食品が隙間な
 く陳列されている。時間と手間のかからない
 食事ができる環境が私たちのすぐ近くにある。
 白いごはんを食べる回数も、減っちゃあるの
 はないか。だが家では家族全体を基準に
 考えるとあまり良いこととは言えない。食バ
 物の大切さを考える機会を失ってしまつから
 だ。世界にはお米に限らず食べ物が得られな

時人が何万人といる。日本でもかつて自国
 米は「高級品」とされた時期がある。家族で
 一緒にごはんを食べることは、その真逆のこ
 とも有り得るのだと知ることだろう。そして
 毎日白いごはんを食べられること、そのお米
 を作ってくださる農家さんに感謝するべきだ。
 もし今日の夕食に白いごはんがあったら、
 一度考えてほしい。一粒一粒に食べる人と思
 った真剣な眼差しが向けられて、八十八年分
 のありったけの愛情が注がれたことを。今日

全国納税貯蓄組合連合会・国税庁

も「あたりまえ」に「家族みんな」で「はん
 を食べられること」の幸せを。そして、それら
 全てに感謝と「これからもよろしく」の思い
 を込めて「いただきます」「ごちそうさま」
 と言おう。八十八年後も「何年経とうと、元
 来の気持ちはずに人々の心の中にあっ
 てほしい。